

第1章

法華経は現代の私たちの物語

法華経や他の経典について、『神国王御書』（定遺887頁）や『法蓮鈔』（定遺942頁）では、(仏の)「御物語」と述べられている。『天地明察』や『光圀伝』の著者・沖方丁(うぶかたとう)氏は、「物語とは人間が自分たちの人生を理解しようとする試み」（『偶然を生きる』角川新書 2015）であるという。

では、宗祖は、法華経をいかなる物語と受けとめられたのだろうか。

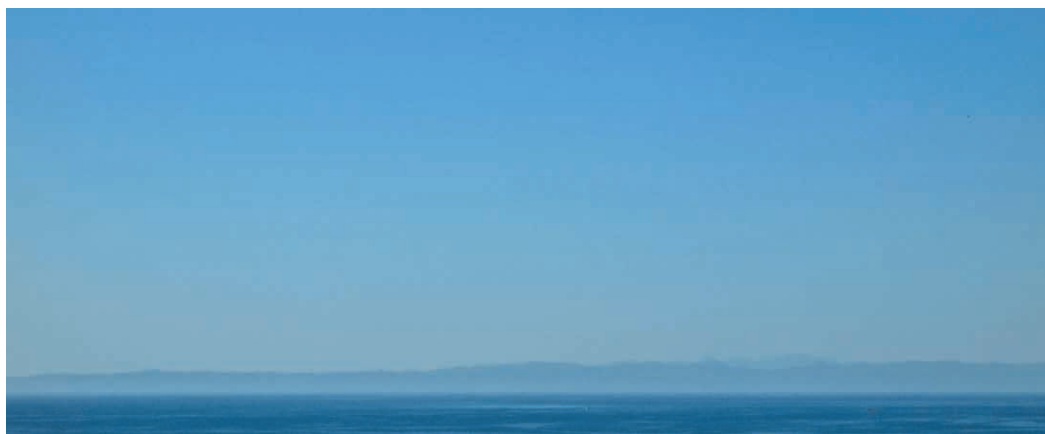
この法華経を「日蓮の物語」と受けとめられた方が日蓮聖人です。(略)

佐渡流罪から鎌倉へお還りになられ、その後、身延山へ入られた宗祖が筆をとられた『法華取要抄』には、次のように記されています。

問て曰く 法華経は誰人の為にこれを説くや。答て曰く (略) 末法を以て正と為す。末法の中には日蓮を以て正と為す也。(定遺813頁)

この有名な一節は、「法華経は日蓮の物語」であると宗祖が受けとめられていたことを、力強く物語っています。(略)

今、私たちは法華経は過去の物語ではなく、宗祖が「法華経は日蓮のために説かれた、現在の日蓮の物語」とお考えになられたように、「法華経は現代の私たち



〈日蓮さまの道〉より佐渡ヶ島を望む

の物語」として説むべきだと思います。(第49回中央教化研究会議基調報告)

平成28年(2016)9月、第49回中央教化研究会議基調講演「法華経を現代に読むーインド学・仏教学の視点からー」の中で、鈴木隆泰師は、『法華経』が強く主張する「法師(ダルマバーナカ)」について、次のように論じている。

『法華経』は釈尊です。仏語であり、かつ、釈尊なのです。「仏語(法身仏)である『法華経』という一切皆成の授記」なのです。そして、如来の滅後にこれを語って聞かせ、「一切衆生に成仏の授記をする」という如来の仕事を代行せよと、お釈迦さまは私たちに命じられて、それを『妙法華』では「行如来事」、原文では「タターガタクリティヤカラ」、「如来の仕事を為す者」であり、それを、「法師、ダルマバーナカ」と『法華経』は呼んでいます。これは、如来の、人々に一切皆成の授記を与えるという仕事の代行をする人です。この法師こそが『法華経』の行者です。「法華経の行者」ということばは、『法華経』には出てきません。日蓮聖人のおことばですけれども、この法師こそが間違いなく、日蓮聖人がおっしゃる「法華経の行者」なわけなのです。如来の〈ハタラキ〉をこの世にあらしめている、代行者です。タターガタクリティヤカラ、「行如来事」です。

法師、行如来事=「法華経の行者」ということば、そしてその自覚こそ、宗祖が「法華経は日蓮のために説かれた、現在の日蓮の物語」であることを象徴している。『法華経』自体が、「法華経は現代の私たちの物語」であることを、その教説の構造の中に持ち、それを読む私たちに迫ってくる。

私たちは宗祖が『開目抄』に、

日蓮なくば此一偈の未来記は妄語となりぬ。(定遺559頁)

等とお示しになられたことばを心に刻み、法華経は現代の私たちの物語としてリアリティをもった信仰に生きることが、宗祖降誕800年を迎える宗門運動の原動力になるだろう。